

AO 7661 (Chicago〔1940〕) = AS, №7 などには認められない。従って、今後 Syllabary の系列的研究（出土地、成立年代、伝承経路など）が必要となるだろう。……（1）

## 現代イタリア語における借用語について

古 浦 敏 生

### abbreviation

E. ……………英 語            G. ……………ドイツ語  
Fr. ……………フランス語        Ital. ……………イタリア語  
X < Y ……………借用語 X は、Y を基にして出来たものである。

（なお、特に断りなく用いられている語は、イタリア語に入りこんだ借用語だと考えて欲しい。）

#### § 1. はじめに

今回の「広大言語」は「借用」の特集号である。そこで、まず、借用語研究の一般的な方法論について考えてみると、およそ、次の5点に注目すれば良いのではあるまいか。

- (1) どんな語が借用語として認められているか？
- (2) それは、どの言語から借用されたものか？
- (3) それは、何時頃借用されたものか？
- (4) その語が借用されるようになった歴史的文化的背景？
- (5) その語が借用された際、どんな音変化、形態変化、意味変化を起したか？ それとも、そのままの形でとり入れられたか？

(1)(2)については、権威のある辞書数冊（尤も、どの辞書が権威があるのか、その判断はむづかしい。）を調べて、どの辞書にも「これは、A という言語からの借用語である」と書いてあれば、それを信用するのも良からう。(3)については、辞書に借用年代が出ているものもあるが、そうでない場合には、（危険な方法ではあるが）次の方法を用いても良からう。例えば、1850年に作成された権威ある辞書には借用語として収録されていないが、1950年に作成された権威ある辞書には借用語として出ていれば、少なくとも、この100年間に借用されたものだと判断する方法である。(4)については、歴史書 etc. を調べねばなるまい。しかし、我々言語研究者にとって最も興味深いのは(5)であろう。なお、これらの点について、くわしくは、関本至：「現代ギリ

シア語におけるトルコ語よりの借用語」(広島大学文学部紀要, 才25巻2号所収)を参照されたい。

筆者は、本稿では、権威のある辞書の代りに、Migliorini, B.: *Storia della lingua italiana*, 1961, Firenze (「Ital. の歴史」) を使って、現代 Ital. における借用語を拾い集めた。以下、E., G., Fr., そして、日本語からの借用語だけを取りあげて、「原語のままの形で使われているもの」と「Ital. 風に直されたもの」とに分けて、アルファベット順に並べてみた。(Migliorini, B. は、こんな並べ方はしていない)。では、どこに筆者の originality があるのか、と問われるかと思うが、頼りない註だけは筆者のものである。

なお、本稿における現代 Ital. は、1861年(イタリア独立)から1915年(才一次世界大戦にイタリア参加)までのものを示している。また、目ざわりではあったが、個々の借用語に一々語義を付した。(付すまでもなく、読者諸氏は御存知のものにまで……失礼とは思いつつ……)

## § 2. E. からの借用語

### (1) そのままの形で使われているもの

bluff「絶壁」, bow-window「弓張窓」, bridge「ブリッジ(トランプ)」, brougham「ブルーム型自動車」, check<sup>①</sup>「小切手」, derby「競馬」, dreadnought<sup>②</sup>「ドレッドノート型戦艦」, ferry-boat「渡船」, film<sup>③</sup>「フィルム」, flirt「男女がいちゃつくこと」, foot-ball「蹴球」, gin<sup>④</sup>「ジン(酒)」, goal「ゴール」, meeting「会」, pickpocket「すり」, pitch-pine「やけの多い松」, poker「ポーカー(トランプ)」, record<sup>⑤</sup>「記録」, skating「スケート」, snob「紳士ぶる人」, sprinter「短距離競争者」, stock「資本」, tight「タイト(衣服)」, trust「トラスト(経済)」, turf「競馬場」, water-closet「水洗便所」, yacht「ヨット」, etc.

### (2) Ital. 風に直されたもの

cacciatorpediniere<E. destroyer「駆逐艦」, grattacielo<sup>⑥</sup><E. skyscraper「摩天楼」, intervista<E. interview「会見」, serrata<E. lock out「工場閉鎖」, tranvai<sup>⑦</sup><E. tramway「電車(路)」, turista<sup>⑧</sup><E. tourist「観光客」, etc.

## § 3. G. からの借用語

(1) そのままの形で使われているもの

Alpenstock「登山杖」, Edelweiss<sup>⑨</sup>「みやまうすゆき草」, Kulturkampf「文化闘争」, Kursaal「別荘」, Leitmotiv<sup>⑨</sup>「主楽旨(音楽)」, Reichstag「ドイツ国会」, etc.

(2) Ital. 風に直されたもの

chellerina<sup>⑩</sup><G. Kellnerin「女給」, neogrammatico<G. Junggrammatiker「青年文法学派」, etc.

§ 4 Fr. からの借用語

(1) そのままの形で使われているもの

cancan「カンカン(踊)」, chauffeur「自動車運転手」, claque「雇いの喝采師」, dossier「記録」, foyer「控室」, fumoir「喫煙室」, garage「ガレージ」, garçonnière「独身アパート」, glacé「冷凍の」, hangar「格納庫」, matinée「昼間興業」, menu「メニュー」, plastron<sup>⑪</sup>「婦人服の胸飾り」, pochade「略画」, réclame「広告」, rideau「カーテン」, soirée「夜会」, soubrette「(喜劇の)小間使い」, etc.

(2) Ital. 風に直されたもの

blocco<Fr. blocus「(軍隊の)封鎖」, bomboniera<sup>⑫</sup><Fr. bonbon「ボンボン(菓子)」, brillantina<Fr. brillante「髪につや出し香油」, caffè-concerto<sup>⑬</sup><Fr. café-chantant「音楽喫茶のコンサート」, cantoniere<Fr. cantonnier「線路工夫」, comunardo<Fr. communard「コムユヌ支持者」, coperto<Fr. couvert「一人前の食事」, decollare<Fr. décoller「離陸する」, divetta<Fr. divette「女芸人」, estradare<Fr. extradier「犯罪人を本国政府に引き渡す」, glassare<Fr. glacer「菓子にこもをかける」, marrone<Fr. marron「栗色」, oblò<Fr. hublot「(船の)小窓」, pedicure<Fr. pédicure「足医」, pista<Fr. piste「(競技場の)トラック」, ristorante<Fr. restaurant「食堂」, sabotaggio<Fr. sabotage「怠業」, salvataggio<Fr. sauvetage「水難救助」, sciovinismo<Fr. chauvinisme「熱狂的愛国主義」, trafiletto<Fr. entre-filet「(新聞の)小記事」, etc.

§ 5. 日本語からの借用語

geisha<sup>⑭</sup>「芸者」, harakiri<sup>⑮</sup>「腹切り」, kimono「着物」, mikado「天皇」,

musume「娘」

## § 6. おわりに

ごく表面的な、うすっぺらな記述に終ってしまって申しわけないが、どの種の語彙はどの言語から多く借用されたか、etc. については、読者諸氏に適当に判断してもらうことにして、最後に註を加えておこう。

(註)

- ① Fr. から入った *chèque* も、これと並んで、用いられている。
- ② § 2(1)で挙げた E. からの借用語のうちで、これだけが女性として用いられている。残りはすべて男性である。何故これだけが女性なのか、追究してみると面白かりう。
- ③ これは、Ital. *pellicola*「フィルム」(女性)の影響で、最初は女性として用いられていたが、のちに男性となった。E. からの借用語のほとんどが男性であった故である。
- ④ *Palazzi*, F. の伊々辞典の後には外来語の一覧表が出ているが、この語は、外来語としては出ておらず、Ital. として本文に出ているので、もはや Ital. になりきっているらしく思われる。
- ⑤ 「レコード(音楽)」の意はなし。
- ⑥ *gratta* は「(かゆい所を)かく」を、*cielo* は「空」を示している。したがって、E. と Ital. とでは、構成要素の配列の順序が逆になっている。この順序が逆になる条件を探してみるのも面白かりう。
- ⑦ E. *tramway* は、元来、「電車路」を示していたが、のちに「電車」をも示すようになった。一方、Ital. *tranvai* は、もっぱら、「電車」の意に用いられている。
- ⑧ E. *tourism*「観光旅行」は *turismo* として Ital. に入っているが、E. *tour* は Ital. には入らなかったらしい。(\* *turo*)
- ⑨ この語は、G. としては中性であるが、Ital. としては男性である。残りの4つの語の性は G. に同じ。
- ⑩ 女性の *Kellnerin* は借用されたが、男性の *Kellner*「(料理屋の)ボーイ」は借用されなかったらしい。
- ⑪ *Palazzi*, F. によれば、この語は E. を通して Ital. に入ってきたことになっている。
- ⑫ Fr. では、男性であった語が、Ital. では女性になっている。
- ⑬ Fr. を文字通り訳せば、\* *caffè-cantante* となるところであろう。

⑭ イタリア人は「芸者」を何と心得ているのだろうか？Palazzi, F. の辞書には“*fanciulla giapponese istruita nella danza e nella musica, che interviene a rallegrare riunioni e ritrovi* 「ダンスや歌のたしなみがあって、会合やクラブが陽気になるようにとりはからう日本娘」”とあった。娼妓ではいけないらしい。いずれにせよ、いかがわしい意味は含まれていなかったの、ホッとした。

⑮ *carachiri* 「カラキリ」とも云う。Migliorini, B. はこの形がまちがっていることを指摘しているが、D'Annunzio は「カラキリ」を使っているらしい。これでは本当の「腹」は切れずに、「カラ（空）」を切ることになる。

## 英語におけるギリシア語からの借用語について

神 笠 公 伯

借用は音韻変化や類堆と共に言語変化に強力に作用する重要な一要因と考えられているが、一体英語においては外来語からの借用はどういう状態にあり、いかなる語がどのような過程を経て借用され、それが英語の体系にいかなる影響を与えたのか、特にギリシア語からの借用という観点のみに限定して歴史的に眺めてみようと思う。

英語は印欧語族のゲルマン語派に属する言語であるから、その本来の語彙は当然ドイツ語と同系のものである。ところが英語においては、本来語だけの増加以外に外来語の借用による語彙の増大が極めて著しく、その点で日本語と同じように混合語の代表的存在とみなされているのである。それは殊に、ラテン語やフランス語などのロマンス語系統のものが多く、大ざっぱに言って、総語彙の約35%がゲルマン語、約55%がロマンス語で、その残りの約10%がギリシア語及びその他の言語の語彙が入ったと言われている。だから、現代英語はゲルマン語派としての文法的形態を保ちながら、語彙的にはフランス語・ラテン語・ギリシア語系統のものが非常に多くて、多少とも高尚な事柄について語ろうとすれば、これらの語彙が絶対が必要となってくるのである。しかし、各語の使用頻度という点から考えると、ゲルマン語系の方が圧倒的に多く、ロマンス語系の語の使用度は極めて少ないようである。なお、語彙を構成する種類から言えば、語彙の中核を成す普通語 (common words) 日常の口語 (colloquial words) ・俗語 (slang) などには本来語が多く、外来語の方はこれを取り巻く周辺的存在で、文章語 (literary) ・科